

# 心理学研究室の日々を振り返って

石 井 徹

かれこれ四十五・六年前になるでしょうか、私が心理学と出会い、学んだ心理学研究室は文学部、しかも哲学科にありました。さらにその昔には理文学部にあったそうです。確かに文学、哲学、歴史学にはあまり目立たない理学テイストが、心理学にはあるようにも見えます。かといってやはり「ヒトとは何か」というある種青臭い問題意識も常に、そして今も心理学につきまといっているように思います。つきまといて欲しいとも思っています。

ただ、心理学もいろいろ、極端に言えば心理学者の数だけ心理学観もあります。そしてそれをいくつかに束ねるなど、私にはとてもできる技ではありません。本稿ではまず広大な砂丘の砂の一粒を小学生用の拡大鏡で見たような、おぼろげで妖しい心理学像をお見せします。名刺のつもりです。悪い見本としてお使いいただければ幸いです。

私が考える心理学の、対極として思い描いているのがAI（人工知能）です。多くのデータを駆使して実に精確に景気予測や行動予測を行うようです。このようなAIはまず、読心術の究極の具現化と見えます。しかもその中はブラックボックス、AIの論理がヒトのそれと同じという保証はまったくありません。結果が全ての世界ですので、「ヒトを超える」ことは一面において必然、ヒトの社会で望まれる部分だけではなく望まれない部分もあって当然と言えます。言い換えればヒトと同じ、理解できる部分もあれば、できない部分も、当然、ありそうです。理解できない部分がこれから増える可能性も否定できない。むしろそちらの可能性の方が、期待も込めて、とても大きいと言えます。AIにとってヒトは当面の目標、ヒトの社会の中に居場所を確保するための一里塚ではありません。

もう一つ、AIは術のかたまりであり、やはり学とは言い難い、という意味で人とは対極です。最も非科学的な考え方ですが、心理学あるいは科学はヒトとともに進化するもの、と考えています。ヒトとともに進化できなくなった文化や学の末路は歴史に明らかだと思います。AIの「学」を理解できない者の嫉み、誤解だという批判は甘んじて受けます。それでもAIに学があるとは見えません。技術以外の何があるのでしょうか。「技術」を軽んじる気持ちはありませんが、「技術」を使いこなすはずの「学」との混同は避けるべきでし

よう。ヒトが見出し、紡いできた学であれば、例えそれが未熟で原始的なものであっても、結果に対する責任はやはりヒトが負うべきでしょう。このかぎりにおいて学は人のものであり、よい器ができたことを理由に、また表面的な便利さを理由に、一人歩きさせてよいことにはならないと考えます。

ともあれ、心理学に対するこのような見方は、一つには、1986年に松江に着任してから少しずつ自覚してきたもののように感じます。その以前、関西でうろうろしている頃には、しみ込んでいたと思うのですが、まだまだ言葉で表現できるものではなかったように思います。（今できている、という自信もありませんが…）

当時の心理学研究室は、室長であった猪股佐登留先生と松川順子先生のお二人でしたが、法文学部文学部哲学教室に属していました。哲学教室は松塚豊茂先生を長として、先のお二人とともに、みなさん同門であり、この点においても、それまでなじんでいた心理学観のまま、仕事に就くことができました。当時は気付かなかったのですが、幸運だったと今になって思います。

当時のエピソードで今も憶えているのが、学生研究室での一幕です。何をしていたのかは忘れましたが（哲学）学生研究室をのぞいていると、哲学のTくんと心理のKくんが釣り竿とバケツという出で立ちで入ってきました。「釣り、これから、どこで？」とたずねるのへ、ニヤツと見せてくれたバケツには既に魚が、2匹だったか3匹だったか動いています。「大橋川で釣ってきました。これから揚げて晩飯のおかずにします。」と二人はニコニコしています。大きなハゼがその後どうなったかは不確かですが、思わず院生時代の「鴨川渡河作戦」が脳裡によみがえりました。

私が着任してほぼ一年と半年後、猪股先生が退官されました。その後、やはり同門の村瀬俊樹先生を迎え、以来、人間科学部創設のために川上直秋先生におこしいただくまで約四半世紀（と少し）の間、心理学研究室は3人体制になりました。

とは言えその後、心理学研究室は哲学研究室とわかれ、社会システム学科、社会文化学科と改組のたびに所属が変わります。途中、まる4年間、生物資源科学部に研究室を構えたこともありま

す。手元で見ると恐らく2001年4月に入学し

た人たちが、いわゆる法文棟の「心理学研究室」を知らない世代になりそうです。松川先生が金沢大学に移られたのもその頃（その一年前）だったと思います。以来、北神慎司先生、増本康平先生、そして蘭悠久先生、と数年ごとにフレッシュな先生方を迎えてきました。人間科学部新設に際しては更に佐藤鮎美先生、源健宏先生を迎え、実験心理だけでも6人体制になりました。2019年4月からは老害も消えて若々しい5人体制です。

この間、もう一つご覧いただきたい研究室の変化はコンピューターの普及です。院生・オーバードクターと呼ばれていた頃、通い詰めた「大型計算機センター」があつという間に卓上にやってきました。今ではバッグの中に収まります。プログラミングという言葉もすぐにパッケージ、アプリと代わり、気が付くとネットワークにつながって不特定多数のみなさんの前に我が身がさらされていました。教室や学会の場以外で自説を述べることにしても、当時から賛否がありました。私

は教室での不備を補う場としてPC上のHP（ホームページ）を使うことにしました。当然、節度は守らなければなりません。教室では話せない微妙なこと、話すと時間がかかりそうなことでもうまくゆけば伝えられる、と考えました。興味深いのは、話しているうちに、あるいは書いているうちに、教室でもホームページのコラムでも、伝えたいことが徐々に明確になってくることです。それ以前に話を聞いていただいたみなさんには大変申し訳ないのですが、年を重ねるごとに伝えたい内容の輪郭や焦点が明確になってきたと感じます（最初がどれだけピンボケだったか、思い返すだけで恐ろしいのですが…）。

この試みの成否を評価していただくために、ここでは以下、その中の一例を再録します。結局ここまでたどり着いた、とお考えいただければ幸いです。またこのような自由を快く与えて下さった人間科学部紀要委員会にこの場を借りて改めて御礼申し上げます。

## Ishii's Lab 「おもちゃ箱」 疑問 19

### 地上に出てこないセミ；「～のつもり」から見える意外な世界

この質問箱では視点の置き換えをテーマにして四部構成で進めてみようと思います。と、いつになくまじめで硬めの書き方になっているのは、以下の部分で引き合いに出すすべての人に失礼にならないように用心したいからです。私だけではなく、すべての人が、「失礼なことをされるのはいやだ」と思っておられるはず。少しでも失礼にならないように充分気をつけながらお話ししてゆこうと思います。

#### 1. 外国のメディアが描く日本、日本のメディアが描く外国

まず最初は、外国のメディアが描く日本です。前の質問箱でも触れたのですが、例えば外国の映画に描かれる日本は、日本人の目から見ると納得のいかないものが多いように思います。「日本ではそんなことしないよ。日本にはそんなものないよ」です。「今の日本では」と言えるのはまだいい方で、「今も昔もそんなことしないよ、ないよ」という描かれ方がほとんどに見えます。

私の関心もあるのですが、テレビのコマーシャルや映画などの映像で見たものがやはり記憶に残るようです。30年以上昔ですが「スパイ大作戦(ミッション・インポッシブルという原題の方がおなじみでしょうか)」というアメリカ製のテレビド

ラマで、日本が舞台になったエピソードがありました。そこで出てきた日本を見て思わずひっくり返った覚えがあります。主人公たちが演じる日本人がどうひいき目に見ても日本人に見えない。着物を着ようが、顔の凸凹を厚化粧で少なくしようが、どう見ても西洋の人ですし、仕草もとってつけた感じです。お屋敷のセットも日本とも中国とも見えない、よく言えば両方の折衷に見えました。その後映画でも同じようなけったいな日本をいくつか見ました。

日本が関わるアメリカ映画に日本の俳優さんが出演されたときに、「それはおかしい、日本ではない」と監督に言ったところ、「いや、アメリカ人の思い描いている日本はこうなんだ、これでいいんだ」とそのまま撮影された、というエピソードも何度か聞きました。そこまで意図的でなくても、最近カンヌででしたか話題になったアメリカ映画の中にもありましたように、また数年前話題になったテレビ番組で、中国からの留学生を主人公にしたドキュメンタリーにもありましたように、外国のスタッフが撮影した日本の風景というのも、都会であれ田舎であれ、どこか違和感が残ることが多いようです。同じ風景を撮ってもスタッフが違っていると、そして視点が違っているとこんなにまで違う街に見えるのかと思います。

このような話は映画やテレビドラマだけではなく、他にも例えば日本をテーマにしたコマーシャルにもありそうです。かつて外国の教科書に紹介された日本がとんでもない図柄になっているという記事を読んだ記憶もあります。

ポイントは人や建物、風景そのものではなく、それを撮影したり演出したりしているスタッフの視点です。映画、テレビドラマ、コマーシャルや教科書まで、外国のスタッフが撮影したり描いたりした日本から感じる違和感がそう思う根拠になります。

で、例によって逆を考えます。視点が同じであれば、国籍や肌の色、あるいは話している言葉とは関係なしに「同じ日本人」を感じる事ができそうです。視点が異なれば、遺伝子的には日本人であっても、日本語を話していても「どこか違う」、「何かが違う」、例えば「アメリカ人みたい」と見えそうです。昔からいつも言われる「新人類」もその仲間でしょう。

そしてもう一つ逆を考えます。日本のメディアが描く外国も同じことになっていないか、です。日本人の目を見た〇〇です。〇〇にはお好きな国の名前を入れてみてください。テレビドラマでも、映画でも、そしてコマーシャルでも、特に今の日本は世界のいろいろな場所で撮影しています。その国のいちばんその国らしいところを撮る、のはお約束としても、問題は、その国のいちばんその国らしいのはその場面、その風景、そしてそのアングルだと思いこんでいる「日本人」スタッフの視点なのです。どんなに美しいバリの夕日でも「日本人の視点」で撮ってしまっただけでは日本の風景になってしまいそうです。現地の人に見せても「違うよ」と言われそうです。現地の人が思っている「世界一美しいバリの夕日」は、例えば現地で売っている絵はがきなどに見ることができそうです。

日本人が見るものだから日本人の視点で撮影した風景でいいんだよ、と言うのは、例えば先ほどの「スパイ大作戦」や映画のスタッフと同じになってしまう。あるいは「本当の日本」、とか「本当のアメリカ」、「本当のバリ」、などを考えるときに、その「本当」とは何なのでしょう。現地の人が思うのが「本当」だとすれば、日本については日本人のイメージが、アメリカについてはアメリカ人のイメージが、バリについてはバリの人のイメージが「本当」ということになります。最近ビデオで見たある日本映画には日本人スタッフが撮ったアメリカの（ニュー・ヨークの）風景がたくさん写っていたのですが、どれも、アメリカ人が撮った風景よりもアメリカらしくなかった気がします。主人公格の日本人3人の男女以外は出演者はすべてアメリカ人（だと思っただけですが）でしたが、場面によっては東京のどこかで撮影して

いるような雰囲気も感じました。

現地の人と思う〇〇らしさではなくてもっと普遍的な日本らしさ、アメリカらしさ、バリらしさがあるはずだ、と考えると話がどんどんややこしくなってきました。教科書にはやはりこちらを載せるべきでしょうが、当の現地の人だけが納得できない「〇〇らしさ」が出てきそうです。公開中の「トロイ」、いかがでしょうか。仮に当時の現地の人に見せることができたとしたら、やはりひっくり返るのではないのでしょうか。まず当時の人はみんなだれもがあんなにキン肉マンだったのでしょか。瞬発力を競うサラブレッド（映画の俳優さん）と持久力を競う農耕馬（実際の戦士）では筋肉の付き方も違うはずなのですが…。

日本、アメリカ、バリ、だけではなく中国もロシアも韓国もそのお隣もみんな、自分の国だけで行動範囲が収まっているうちはそれでよかったのです。しかし今、いいものも悪いものともに、国境を越えたおつきあいがどんどんさかんになっています。日本人だけが思う日本らしさだけでは収まらなくなっています。外国の方が思う日本らしさだけでもよくないでしょう。両方をつきあわせて、お互い納得のいく日本らしさ、どちらも違和感を持たないですむ日本らしさを探す作業が必要です。あるいは作る作業になるかもしれません。「トラ・トラ・トラ」も「パール・ハーバー」もともに、日本人もアメリカ人も見る時代です。どちらがどちらを見ても違和感のない「真珠湾攻撃（あるいは日米開戦）」を考えないと興行収入は上がらないのです。

さらにこれは国同士の話だけではなく、異なる年代同士、男性と女性、先輩と後輩、先生と生徒、上司と部下、あらゆるところで必要な作業です。新人類と高齢者が同じ職場で働く時代です。大勢が働く場であるほどいろいろな方がおられます。いっしょに働く、いっしょに暮らす以上はお互いに知らんぷりもできません。多かれ少なかれ理解し合うことが必要になります。ならば、理解し合うことを通じて「自分」を広げましょう。芸の幅を広げるのたとえです。広げた芸はきっと身を助けてくれるでしょう。狭く閉じこもってしまうよりははるかに健康的で、はるかに生産的だと思います。

理解すべきは相手の視点です。理解できたなら、それはそのままさらに続けて相手の視点に立ってみることになります。そこで初めて違う風景が見えます。同じものを見ているのにこんなにも違うのか、です。しかしこれがけっこう難しいのです。理解するのが難しい、相手の視点に立つのが難しい、です。難しいから必要だ、練習しなくては、と循環します。

相手の視点に立つのが難しいのなら、せめて、



自分と異なる視点があることをお互いに認めましょう、お互いに尊重しましょう、という方法もありますが、これはこれでまた難しいです。信頼というもう一つのテーマもからんできます。加えて私たちの気持ちの中には、「他の人と違っていい。これが私が思う日本（〇〇）なんだ」という気持ちと「私が思っている日本（〇〇）は、みんなも同じように思っているはずだし、そうでなきゃおかしい」という気持ちの両方があります。私たち誰もが抱えている矛盾です。いろいろな意味でこれはおそらく程度問題で、実はその程度こそが一番気になるところなのですが、ただいま提案の真っ最中です。まだうまく報告できません。今しばらくお待ち下さい。

ですので、こちらについてはとりあえず別の質問箱にゆずることにして、ここでは練習するという方向で考えてみます。練習に使う小道具は、何でもいいのですが、今回は「セミ」にします。

と言いますのも、先日たまたま見つけた新聞記事がきっかけでジュウシチネン（17年）ゼミというのを知りました。少し調べてみましたらけっこう想像力をかき立てられてしまいました。よく知らない世界だったので、かえって新鮮で自由に想像できたのだと思います。なつかしのTVドラマ「ウルトラQ」や「ウルトラマン」、さらに最近の映画「マトリックス」から聖書の世界までつながってしまいました。順を追ってお話しします。よろしければおつきあい下さい。

## 2. セミ

広い世界にはいろいろなセミがいるものです。アメリカにはジュウシチネンゼミというのがいて17年か13年ごとにいっせいに成虫になるのだそうです。今年はその当たり年でアメリカ中がジュウシチネンゼミの鳴き声でうるさくなりそうだ、という記事が新聞に載っていました。マイクロソフトエンカルタ百科事典'02で調べてみましたところ、例えば日本のアブラゼミは、卵の期間が約300日、若虫の期間が5年、合計6年近くかかって成虫になるのだそうで、それに比べれば2倍から3倍長く地中にいることになります。これを読んでいただいている方の中には、今年地上に出てくるジュウシチネンゼミと同年の方もおられるのではないのでしょうか。あなたと同年のセミが今年初めて地上に出てきます。地下にいた時間の長さをいちばん実感していただける方でしょう。

新聞記事には、なぜそんなに長い間地下にいるのかという問いに対して、「そうすることで外敵に食われないため、絶滅しなくてすんだのだ」という専門家のコメントも載っていました。

でもそうだとすると、なぜ地上に出てくるのでしょうか。

そうでなくとも「セミの若虫は何年もかけてゆっくりと成熟し、やがて地上にでて、樹木の幹にのぼり、体をしっかり固定して脱皮し、交尾をし、樹液をすい、ふつうはせいぜい2～3週間で死ぬ」のです（マイクロソフトエンカルタ百科事典'02）。おまけに「セミの一生でもっとも死亡率が高いのは、地中に潜る前の1齢幼虫のときである。孵化が昼間に行われることもあり、地上に落下した幼虫の多くはアリに食われ、1齢時の死亡率は95%以上にもなる（C）小学館」（スーパー・ニッポニカ2001）のだそうです。

ずっと地下にいた方がはるかに安全なはずです。仮に、それでも地下の方が危険なのだととしても、そこで長時間をかけて育つこととやはりつじつまが合いません。

地下は暗いしジメジメしているし、なんと言っても窮屈だ、自由に飛び回れない、というのは地上の世界を知っている人間の言い分です。木の枝の裂け目で卵からかえってすぐに地下に潜ったセミが地上の世界をどこまで知ることができるか、そしてそれを憶えていられるか、とても疑問です。暮らしている時間から考えると、ほとんどのセミにとっては、地下の生活の方がふつうでおなじみのはずです。

時期がきたら地上に出るように遺伝子に組み込まれているのかもしれませんが。そうだとすると、生まれながらにして自滅のプログラムを抱えていることになります。そんな危ないことが遺伝子に書き込まれていて、よくぞ今まで絶滅しなかったものです。それより少しでも長くたくさんのセミが生き残るためには、やはり地下ですべてをすませた方が安全だったのではないのでしょうか。あるいは別に空を飛ばなくても、ちょこっと地上に出てきてまた潜る、というふうに遺伝子に書き込んでもよかったのに、と思います。17年も地下にいるセミなら、ひょっとすると時々出てきては（ひなたぼっこでもして）また潜っているのかもしれませんが。いい日和になると決まって甲羅干しをする亀の要領です。

あるいは、地上に出てこないセミもいるかもしれません。

実際、ジュウシチネンゼミの中には、原因はいろいろだと思いますが、地下にいるうちに死んでしまうセミもいるはずで、地上に出てこないセミ、その1です。

他にも例えば、セミの雌は1匹で200個から800個の卵を産むのだそうです（「むし くらしとかいかた」ひかりのくに株式会社）。平均して500個だとしますと、その95%が1歳齢でいなくなりますから、ほぼ25匹が地下で育つことになります。この中の2匹が地上にでて飛び回れば、親の代と同じ数のセミ、ということになります。2匹

未満であれば、今頃セミはすでに絶滅しています。逆に2匹以上であれば、たとえわずかであっても積もり積もって、今頃は世界中がセミだらけになっているはずです。ここ10年くらいに、特にセミが増えたとか、減ったということがなければ、ほぼ2匹が保たれていることとなります（環境汚染はもちろん別の話です）。

そんなにうまく調節できるのでしょうか。実は毎年10匹以上が地下に待機していて、その中の選ばれた2匹が地上に出てくる仕掛けになっているのではないのでしょうか。特別に選挙をする必要はありません。重力に縛られているのがきゅうくつになったセミだけが出てくる、というので充分です。他のは今の暮らしに不自由を感じていない、満足している、そんな情景です。だとすると残る8匹が地上に出てこないセミ、その2ということになります。

あるいは逆に、地上に出てくるセミは、本来地下で天寿を全うするはずが、何かの理由でできなかったセミ、生き残ったセミなのかもしれません。

「そんな馬鹿な、セミはすべて地上に出てくるものだ」とおっしゃる方へは、「そう思う人がほとんどだったから、「地上に出てこないセミ」を誰も真剣に探さなかった。だからいまだに見つかっていないだけなのかもしれない」という反論を用意しました（視点を置き換えるむずかしさその1です）。

試しにジュウシチネンゼミを最初に研究した人のつもりになってみましょう。最初は「変わったセミがいる」といううわさ話から始まるのもっともありそうな展開です。地元の人は昔からみんな知っているけれど他の地域の人から見るとちょっとびっくり、というお昼のワイドショーと同じ展開です。試しに聞いてみました、するとしばらく見なかった、もう十年以上見たことがなかったセミだ、調べてくれ、調べてみましょう、です。で、観察を始めます。1年がたち、2年がたち、すぐに5年くらいはたつでしょう。まだ出てきません。10年たちました。まだ出てきません。地元の人の話ではもう少しかかりそうです。13年目で何匹か出てきました。でもまだ少ないようです。

15年がたちました。ひょっとしたら地下で死んでしまっているのではないか、という思いが頭の隅をよぎります。でも掘り返すわけにはいきません。16年目が終わり、ひょっとして「地上に出てこない」新種かも、とあらぬ誘惑に駆られ始めたのを見透かすかのように、地下からポコポコとセミの大群が顔を出しました。数え初めて17年目、「ジュウシチネンゼミ」だ！、です。でも、これって、2回地上に出るのを忘れていて、3回目も遅刻して出てきたアブラゼミとどう区別するのでしょうか？

さらにこのとき、出てきたセミにばかり気をとられて、つい、残っているセミ、あるいはより深く潜ってしまったセミを見逃してはいないでしょうか。

そんなのもいるかもしれないけれど、それは突然変異か何かの少数派に決まってるよ、とおっしゃる方、まだ「セミは地上に出てくるもの」という固定観念にとらわれています。そう思うから、そうでないセミがいても、見えないのです（視点を置き換えるむずかしさその2です）。

昆虫は世界中で少なくとも80万種がいるのだそうです。そしてさらにそれと同じかそれ以上の数の未記載種があるとされているのだそうです（マイクロソフトエンカルタ百科事典'02）。蝶と蛾の論争も有名です。これが蝶々独自の性質だ、というものが発見されるとほぼ同時にその性質を持った蛾が発見されるのだそうです。その逆もあって、今現在、蝶と蛾の境界はとても曖昧なのだという話を聞いたことがあります。「地上に出てこないセミ」がたくさんいる可能性は、まだ少しはありそうです。

と、ここまで考えてもなお、だけど「地上に出てくるセミ」をそもそもセミと呼ぶんだよ、という反論も聞こえてきます。「地上に出てこないセミ（によく似た生き物）」が見つかったときに、初めて、その生き物にどんな名前をつけようか、名前では先輩になる「セミ」とどう区別をつけようか、と考えればよいのだ、というご意見です。これには私も九割五分近く説得されてしまいます。

仮に探しても徒労に終わる可能性が高そうです。そもそも「地上に出てこないセミ（によく似た生き物）」などいると思っていないから、何をどう探していいのかよくわかりません。「これかな」と思っても、上にも書きましたように、見つけたつもりになった次の瞬間、たとえ20年目でも、30年目でも、ポコッと地上に出てしまうかもしれません。

ですが、それでも、よくよく確かめもせずに「地上に出てこないセミ」などいないと思っている、というところがどうしても引っかかります。「一寸の虫にも五分のたましい」です。特に科学の歴史はこのような固定観念をうまく破った行為の連続ではなかったのでしょうか。また、実際にそのような生き物があるかどうかとは無関係に、いると仮定して、そこから見える世界をシミュレート（疑似体験）してみるのも、ひょっとしたら私たちの視野を広げるかもしれません。その結果がもしいいことや役立つことにつながれば（個人的には面白いことにもつながれば…）、それはそれでよしとしてもいいように思います。

### 3. 「地上に出てこないセミ」 から見た 「地上に出てくるセミ」

ジュウシチネンゼミに限ったことではないのですが、仮に、セミは、その大多数が地下に残る、と仮定してみてください。地上に出てくるのはごく一部です。地面に埋まったそんなたくさんのセミなんて見たことないよ、とおっしゃる方、地下のセミはさらに深く潜って暮らしている、と考えてみてください。アリの巣ならぬセミの巣もあるかも知れません。地上の生き物が考えているよりもさらに深く、「よりマグマに近いところは地熱の作用もあってけっこう暖かい」という話もありました（そう言っていたのは確か「タンク」という名前だったような…）。

地下のセミが仮に地上の世界を知らないとしなすと、地上に出ていったセミは、彼らの目から見ると、いきなりいなくなったこととなります。神隠し、です。そこに無理に人間の感情を持ち込む必要はありませんが、一つだけ、地上に出るセミは何をきっかけに出ようとするのかは気になります。

そもそも「出る」という表現もおかしいのです。地下にいる間は他のセミと同じく地上を知らないわけですから、いきなり今いる世界がいやになって、どこか他へ行こうと思い実行した、ということになります。その先がたまたま地上だった。そうだとすると、セミというのはある時期が来るとその環境から別の環境に移り住む習性を持っている、ということになります。その先は別の地中でもいいし、さらに深い地中でもいい。地上に出るのもいい、という言い方になります。

ここですごいのは、例えば地上に出たセミは単に地上をはい回るだけではなく「空を飛ぶ」のです。その環境の特性を目一杯活かすように身体の形態まで変えてしまいます。仮にジメジメした別の地中に移り住んだセミは、その環境に適應するために、ひれが生える、といってもおかしくないくらいの変身ぶりです。例えば水中に移り住んだセミはヤゴにもなりそうです。宇宙に出た人間がその場で身体の形態を変えることができるか、と考えるとそれはとても無理な話で、そのことによって逆にセミのすごさがわかります。ご承知のように、この習性はトンボなど他の昆虫にも多く見ることができ、これらの昆虫なら、宇宙に出ても環境に合わせて即座に変身（バルタン星人？）できるかも知れません…。

一方、今度は地下のセミは地上の世界も知っているとして仮定してみます。木の枝で孵化して地面に落ち、地中に潜るまでの記憶がかすかにある。あるいは長い地下生活の間何度か、一年に一度くらいは、地面から頭を出して外の世界を見ている、と考えてみましょう。この場合、セミは出るか

ないか、選択をすることになります。「どこかへ行かなければ、そうだ地上へ行こう」です。でも、地上に出てもそれまでの人生（？）の百分の一くらいしか生きられないのに、なぜ出てくるのでしょうか。例えば地上に出てくるまでのアブラゼミの6年間はほぼ313週で、地上の寿命が2～3週間だとするとだいたいこの計算になります。仮に人生80年として換算しますと、最後のおよそ9ヶ月ということになります。

おまけに地下にいた時からは想像もつかないエネルギーッシュな動きをすることになります。なんと言っても空を飛ぶのです。長い年月をかけて成長するのは人間と同じだとしても、79才と3ヶ月でいきなりスーパーマンになる、という構図は、二重の意味で、人間では考えられないことです。雄も雌も見かけはお年寄りですが、とてもエネルギーッシュなスーパーゼミなのです。私たちが毎年目の当たりにしているのは、単に地下で生き残っただけでなく、そこでは発散しきれないすごいエネルギーの持ち主のようです。そのエネルギーを2・3週間で一気に使い果たすのではなく、うまく使えばもっと長生きできそうなものとも思います。

その一方で地上に出てこないセミの目には、地上に出たセミのこのような姿はどんなふうに見えるのでしょうか。それまでとはまったくの別世界でパワフルに飛び回る「神様」か「天使」に見えても不思議はない光景です。頭上の輪こそありませんが、背中から羽が生え、まぶしい光の中で自由に宙を舞っています。他にも超能力者、救世主、などなど私たちはこのような存在を表現するのにたくさんの言葉を知っています。地上に出てこないその他大勢のセミにとって、これらスーパーゼミは文字どおり「光の中」へ飛んでいった特別な仲間であり、自分たちの親もそうであったという記憶が（かすかでも）あれば、「我々は神の子」という表現が少しは素直に出てきそうな状況になっています。古いのを承知で言いますと、光の中から神様が降りてきて人類の先祖となったというお話は世界中にあります。日本にも「天孫光臨」というお話があります。単なる神話、架空のお話ではなく、もう少しリアルに見えてきます。

### 4. 視点を変えることのおもしろさとむずかしさ

勝手な想像が、死生観にまで行き過ぎないように手綱をしめた方が良さそうです。以上はもちろん想像でしかありませんが、例えば「セミ」を観察しているだけで「神様」を信じる気持ちの源を、かなりリアルにのぞき見ることができるのに気付いていただけたと思います。いきなり「神を信じなさい」と言われても反発する気持ちがわくだけですが、こんなふうに地下ゼミの視点で地上ゼミを眺めてみると、そんなこともあるか、「あの世」



ってこんなふうかも、こんな形の神様ならいるかも、神様ってこういうものかも、と誤ってしまいます。こんなふうに「あの世」や神様を描いてしまうと、いろいろな（神様を信じている）方からお叱りを受けるかもしれません（その前にバチが当たりそうです…）。しかし逆に、こんなふうに想像できるから「神様」や「あの世」の存在を素直に信じることができるのかもしれません。

そしてこの程度のことは、恐らく何千年も前から、どこかでセミをじっくり観察した、何人もの誰かが考えているはずのことなのです。そんなことを考えた直後にたまたま「イエス」という名のパワフルな人に会った誰かがいたかも知れません。あるいはそんなパワフルな人のうわさを聞いた誰かがいたかも知れません。自分を地下のセミにたとえれば、うわさの主は地上の光の中に出るセミ、ということになります。現代であればそんなことを考えた直後に「次の宇宙飛行士」に決まった人がおられるかも知れません。私はひょっとして地上に出るセミかも、です。あるいはご家族の一人が「次の宇宙飛行士」に決まった方がおられるかも知れません。どなたも多分、「おなじみのふつうの世界」からほぼ「未知の世界」へ劇的に飛び出して行った（行く）パワフルな人たちです。同じく、このようなセミをそのまま人間に置き換えると映画が3本くらい作れそうです（監督はウォッシュスキー兄弟です、もちろん…）。

その先が地上でも宇宙でも、ポイントは「おなじみのふつうの世界」からほぼ「未知の世界」へ視点を移すことです。移す方法はまず実際にその身になる、という方法があります。自ら未知の世界に飛び出してみる方法です。飛び出した人の目には、かつての「おなじみのふつうの世界」はどのように映るのでしょうか。そのとき飛び出した人の中ではどのような心理上の変化が起きているのでしょうか。まだ飛び出していない人とどんなふうに比較すればよいのでしょうか。関心はつきません。

飛び出す先も地上や宇宙にかぎりません。外国でもよその町でも、あるいはよその学校、よそのクラス、これまでとは違う遊び仲間、あるいは子どもの世界から大人の世界へ、家族を離れて一人暮らし、でもいいのです。もう少し個人的なレベルでは、イメージ・チェンジをしてみた、というのも守備範囲に入りそうです。さらに、何か映画を見た、小説を読んだ、音楽を聴いた、絵画を見た、などというのも、ヴァーチャルではありますが、未知の世界を体験したことになるかも知れません。学問の世界ももちろん入ります。飛び出す先が竜宮城（バラダイス）なら「浦島太郎」です。機会を見つけてぜひ「その後の浦島太郎」を考えてみたいです。太郎の人生観の変化や周囲の人と

のズレ、<sup>あつれき</sup>軌轢が焦点です。

そしてここに視点を移すもう一つの方法があります。「～のつもり」です。疑似体験と言ったり模擬体験、あるいはシミュレーションと言ったりします。小説を読んで、あるいは映画を観て、そのあといつもの世界が違って見えた経験をお持ちではないでしょうか。小説や映画の主人公の視点に知らない間に立っていた、という場面です。これを意識的にしてみましょう。今まで見えなかったものが見えてくるかも知れません。あるいは見過ごしていたものが見つかると思います。

そしてこのときもう一つ必要なのが、よく知っていることです。よく知っていればいるほどよりリアルに「～のつもり」になれます。幼いころ「〇〇ごっこ」しませんでしたか？よく知っていればいるほど楽しかったはずです。小学校や中学校、高校で勉強することの目的が一つここにあるかなと思います。大学の勉強にも、そして社会に出てからの勉強にもこの目的が含まれていそうです。ただ、大学や社会の場合、それを使って「～のつもり」になることも、そしてそこから今まで見えなかったものを予測し、確かめるのも、勉強や仕事の大切な目的になります。

私たちは「地上に出てこないセミ」と「地上に出てきたセミ」の両方を見る、あるいは少なくとも考えることのできる立場にいます。でもつい、片方の存在を忘れてしまいます。忘れていたものなら思い出せばよいのですが、そもそもそんなものなどない、と思いこんでいます。固定観念です。固定観念はそれなりに役に立つ場面もあるのですが、これをはずすのが、思っている以上にむずかしい。はずそうとして勉強すればするほど凝り固まってしまう場合もありそうです。きっとコロネブスの卵なのだと思います。

どなたか天才肌の方がポンと上手なはずし方を見せてくださるような予感がします。でもそれだけではやはり他人まかせの無責任です。及ばずながらを承知の上で私も考えてみるのですが、やはりむずかしくて、本当に地面に潜りたくなくなります。

\* 「セミの一生」の図版やセミの写真そしてコガネムシのイラストは「むし くらしとかいかた」（ひかりのくに株式会社）からお借りしました。ここに記して謝意を表します。

（HPへの初版公開は2005年～2006年頃と記憶しています。本稿では、2011年5月23日版をもとに、改行等を中心に補正しました。HP上の図版は全てはずしました。）